

東部ニューギニア

慟哭の戦場（その二）

茨城県 浦 沢 良 平

非戦闘地区でも悲劇が続発

私の所属する連隊はウエワク東方ニューギニア第一の大河といわれるセビック河の上流マリエンベルクにおいて、付近の警備と各部隊との連絡の任務を命ぜられ、その中で私はマリック警備の命を受け、新たに配属された兵を加えて、二十余人の小隊長として任地に着いた（前年十二月、少尉に任官）。

マングローブの繁る湖湾がウエワクとマダンの間の重要な船舶基地となっている。基地であるため若干の糧秣が集積してあった。五、六袋の白米、二、三袋の塩、その他少々であるが小隊を狂喜させるには十二分な食糧だった。この食糧は軍からの預かり物であり、一食も自由にならないが、これだけのものがあるとい

うだけで、人間の心が何と豊かになるかを知った。加えて海の幸、山の幸も少々手に入るようになった。

数十人の現地人はマングローブ深く逃げて、水上の樹上に仮小屋を立てて生活をしていたが、日中は交代で警備地に来てよく協力してくれた。

ここで数カ月ぶりで床のある家に住んだ。南海特有の青い海、岸壁に立ち、澄み切った海中を眺めると、群れなす熱帯魚が悠々として遊泳する見事な美しさは、しばし戦いの激しさを忘れさせてくれた。

マリックは幅数十メートル、延長三キロほどもあるマリック半島の抑えの地点に位置する。数百メートル奥地に入ったジャングルに宿舎を建てた。ウエワク、マダンに通じる地点で、特に船舶にとっては重要地点である。

この酋長をヤップと言ったが、このヤップが好人物で私と意気相通じるといふか、夜が明けると毎日のように宿舎に来て、種々の作業に協力してくれ、彼等の捕った魚やカニ等の土産が私達を喜ばせてくれた。

彼等の落としてくれる椰子ヤシの実に舌鼓を打ち、魚を食べ、バナナを食して、久しぶりに人間らしい生活を送ることが出来た。

しかし米軍機の襲来は相変わらずで、日に三度、午前九時ごろ、正午、夕刻五時ごろには必ずやって来て、銃撃を浴びせて去って行く（恐らく偵察を兼ねての威嚇ではないか）。私達はこれを定期便と呼んで、その時間にはジャングル内に潜み、防空壕に退避して敵機の去るのを待つのである。比較的単純で平和な日過ぎて行く。

時にはヤップのカヌーに乗り集落を訪問する。子供とも仲良くなった。現地人の協力なしでは、私達の生活は保証されなかったであろう。食事も彼等に習い生活様式も彼等同様になり、日々現地人化していった。一発の手榴弾で数十匹の魚を捕り、月夜の晩には海岸に上がって来る海亀を待つ。またある時、海岸に流れしてきたドラム缶を拾い上げて風呂を作った。上陸後初めて風呂であった。このドラム缶風呂の何と快い夢心地であった事か。そして最大の宝物は製塩をするこ

とが出来たことだ。少量の海水を汲み入れ、敵機を警戒しつつ（もちろん夜間のみ）、三日いや三夜海水を煮詰めて出来たドロドロの塩水。天日に干して塩らしい塩。この試作品はもちろんヤップに贈呈した。

この両手一杯程度の塩がどれほどヤップを喜ばせたことか。彼は跳び上がって我々に抱きついた。そして製法を教えてやった。彼等は塩の製法など全く無知で、海水から塩が取れることすら知らなかった。戦前には白人との交流はあったものの、彼等から物資をもらい、彼等に労働を提供したに過ぎなかったようである。私達は三年有余、現地人の財産である椰子林を倒し、バナナの実だけでは足らずその幹さえも食し、畑を荒らし集落を奪って、辛うじて生き長らえて来たのだが、彼等に与えた物は何かあったらう。上陸当初こそ少々の衣類はあったが、教えたものは彼等に役にも立たぬ日本語の片言ぐらいた。しかしこの塩の製法は彼等に与えた宝物と私は信じている（彼等は塩分の強い野草で塩分補給に当てていたようだ）。

ある日、私は土産の魚をアブス（薫製）にし、情況

報告のため連隊本部に行った。数日後、マリックは今までにない大爆撃を受け、折悪しく停泊中の大発乗組員数人に負傷者が出了、との伝令が来たため急ぎよ小隊に帰隊した。通行部隊の不用意な炊煙が発見され敵機のノースアメリカンの爆撃を受けたとの事であった。宿舎はふっ飛び椰子は倒され、いたるところの弾痕は無惨であった。巡察中とはいえ啞然として、しばらくは荒れ果てた警備地を見回ったが、負傷者もたいした事もなく、その負傷者もウエワクに入院の手続きをとったとの報告に、ひとまず胸をなでおろした。

数日後、岬の先端にあるダルバップの視察に出掛けた時の事である。ヤップのカヌーに七人（うち兵二人）が乗って出発した。昼間は行動できないので夜間に湾を横断することになった。夜光虫がキラキラする湖水、南十字星を頭上にしてちよつとした遊覧気分、約五時間ののち目的地に着いた。カヌーの走行中、現地人は歌を和し、船べりを叩きながらワニの襲来を警戒する。ダルバップに着いた翌朝、朝食をとっ

ていると、数機編成のカーチスホークが沖合をウエワク方向へ飛行して行く、と思う間もなく別の編隊がダルバップを目指して銃撃を加えてきた。何しろ前後は海に突き出した半島であり、敵からは格好の目標だ。私達は素早く椰子林を盾とし、かねて設置のタコ壺に入る。何度も連続する銃撃の場合、通り一辺の盲爆に過ぎないのだが、先日のマリック攻撃、今回のダルバップは明らかに作戦爆撃の模様だ。

一編隊が去る頃には別の編隊ノースアメリカンが来襲。集落を目的に飛行し、逆行し反復また反復、延べ数十機に及び前後一時間近く銃撃を継続した。家屋は飛び椰子は倒され、弾痕は身の回りに無気味な音を立てて飛び交う。地上からは無抵抗。ノースアメリカンは椰子の葉をかすめるほどの超低空で、地上の一人一人を目標に定めているような有様である。敵の方向を見、射角を判断して這いながらの移動だ。今まで伏せていたところに爆弾が落ち大きな穴があく。その弾痕を目指して飛び込む。一度落ちたところには二度と落ちない。体験からきた常識だが、この狭い場所に数十

機の連続爆撃では、どこも安全とはいえない。

期を見てまた移動するが、現地人の犠牲者が続出した。彼等はタコ壺でじっとしていることが出来ず、走り回って標的になった。ヤップはどうしたか。息つく間のない銃撃のため確かめる術もない。運を天に任せて大の字に寝ころんだ。機体から身を乗りだすようにしている射手はマフラーをなびかせ、飛行メガネをつけた顔が間近に見られる。超低空飛行のため、風波にあおられる椰子の葉や樹は折れんばかりに揺らぐ。現地人は泣き叫んでいる。ようやく遠く一機また一機と去って行った。私の在島中、これ程猛烈な長時間の攻撃を受けたのは最大の体験だった。が、いかなる幸運か、かすり傷一つ負わない我が身をかえりみて、不思議な感慨を覚えたものである。

現地人十余人の死傷に対して、何とも慰めの言葉もなかったが、出来る限りの処置をした。そして新たにダルバツプから三人の現地人を連れてマリックに帰隊した。この頃から連合軍のウエワク上陸作戦が本格化

したものと察知されたが、予想を裏付ける如く、ノースアメリカンの襲来は目を追って激しく熾烈さを加えて来た。何しろ警備地は狭く不合理な地点だが、船舶の発着地としては重要地点である。ジャングル内へジャングル内へと移動しながらも無抵抗（悲しいかな対抗する兵器がない）で、全く身をさらす戦況下、小隊の死傷者は増すばかりだ。

現地人も最近顔を出さない。たまに訪れるヤップはいつになったら「日の丸」の飛行機が飛んでくるのか？等の質問をする。夜間は艦砲射撃の曳光弾に照明弾が無気味さを加える。かくするなかに連隊は新たな警備命令を受け、コープに転進することになり、私達小隊も朝部隊（第二十師団）と交代し、三月あまり住みなれたマリックを去って連隊に復帰した。

ニューギニアの行軍はどこも同じで、湿地あり山あり谷ありだ。その労苦はボギヤからの転進と何ら変わるところがない。今回はマリックでの給養で元気を回復し、別れを惜しんで、見送りのためについて来てく

れたヤップ以下十余人の現地人の援助で、現地行軍中最大の大名行列が出来た。コープはウエワクの東方（距離不明、兵の行軍速度で約十日の距離）で海岸から二、三キロ山よりの地点である。コープでは船舶隊の中野中尉（茨城県稲田町）以下数百人が新たに連隊に編入されて新戦力となった。各大隊とも連隊長を中心に宿舎を張ったことはラエ以来久しぶりの事であった。

コープ集結は連合軍に知られず、当分は爆撃の危険もなさそうである。しかも狭いマリックと違い奥深いジャングルは、どんなに安心感を与えてくれたであろう。名もない大木は二抱えも三抱えもあり、日の光も通さないほど生い茂ったこのジャングルは、遮蔽物としても最高であった。

この付近には現地人が食べるサゴ椰子が多く、食糧不足に悩まされる事もなさそうである。連隊から土屋中尉を中心として、毎日サゴ椰子採取班が編成され作業に当たる。椰子の材質にもよるが、一本の椰子からは百人分近い澱粉が採取される。作業は手斧、帯剣等

で直径五十センチほどのサゴ椰子を切り倒して表皮をはぎ、中の繊維質を砕き水で濾過して澱粉質を採る。

この麩のような澱粉を一、二合焼いて常食とする。ただしサゴ椰子ばかりを三日も続けると、嘔吐を催し、どを通らなくなるため、必ず椰子のコブラや鳥、魚等の蛋白質を併食しなければならない。澱粉と一緒に見つかるビナタン（ウジの一種）は非常に美味だった。

現地人は海岸や川辺に出て手槍で魚を刺し、手製の弓矢で鳥を捕る。山野に出れば彼等のみの食糧は十分取れるが、彼等の数倍もの部隊への給養は当初こそ容易であったが、日時を経るに従い自生物も減少し、食べ尽くしてしまうようになる。部隊全員が逐次自活体制に入っていた。蛋白資源の確保のため隊規に従って許された小銃、手榴弾を携えて兵達は山中に分け入る。ニューギニアは鳥の種類が多く、オウム、クジャクをはじめ大きささまざまな鳥の天国である。なかでも火食鳥は王者の風格を備え、体長も百五十センチもあり、一羽の火食鳥を捕れば中隊全員の胃を満たすのに十分だ。しかしこれがなかなか捕れない。

魚の群れの中に手榴弾を投げ込むとスズキ大の魚を四、五十匹捕ることが出来、谷川に入っては長さ一メートルのウナギと大格闘の末捕まえたり、兵器についている鋼鉄や鉄棒の輪カギ等を石で磨いて、手製の釣り針を作り出したのもこのころである。それまで釣れた事のない熱帯魚が面白いように釣れた。セビック支流では一日二、三十匹のエビが釣れ、ヘビヤトカゲは小銃の標的になり、草原を走り回っては野ネズミを捕らえるなど、知恵を絞り工夫をして食糧の確保に精をだした。ジャングルを切り開いてサツマイモ、トウモロコシ、カラシ菜、アズキ等の種をどこから手に入れたのか、農耕も始められた。農耕地は敵機の発見を恐れて、遠く三、四キロ離れた地点で行われた。

湿地帯には田を作り米も播いた。連隊の背のうから取り出された糞が一合ほどあったので、これを播いた。しかしいつ発芽するのか、連隊で食べられるのはいつになるのか、こんな計算より播けば芽が出て必ず米になる。と信じて疑わなかった。

マリックは海岸のため非常に蚊が少なく助かった

が、コープのジャングルはハンサと同じ蚊の大群だ。マリアの発熱によって体力は減退する。この頃、同期の花井ほか数人が戦死、高木、田中、宮本等はマリアにかかって後送になった。

ある日、私は大隊長の命を受け柴崎少尉（豊橋予備士官学校）と共に、アレキサンダー陣地偵察のため兵四人と共に部隊を離れた。予定は六週間。私達一行六人はまず海岸線を西へ西へと進んだ。いまだ西下部隊落伍者はその後を絶たずの状態である。彼等は本隊を追及中なのだ。これらの八割までが重患者で、よくここまで来られたものだと思った。時に現地人の集落で体力の回復を図り、時に警備部隊の世話になりながら本隊を目指して行軍しているのであった。しかし本隊を追及し得る兵は彼等のうち何割いるであろう。彼等は路傍に病むが最後、餓死か、自決かの道を選ぶほかないのだ。どうにもならない戦場の無慈悲さ冷酷さを目の前にする。

転進に次ぐ転進の果ては、我々將兵に人間性を喪失

させてしまったのであろう。ギリギリの飢餓戦線において人間一人が生きていく時、戦友も上官もその差別を忘れ、己一人の身を守るのに汲々となるのもやむを得ないことであろうか。作戦命令は一木一草をも戦力化させて戦うことを要求する。限りある体力と乏しい糧秣を他人に与えて自分が餓死に甘んずるなど、聖人君子ならいざ知らず、我々凡人に何が出来るよう。物の有り余る平和日本の現代人から見た当時の我々は、瀕死の戦友を見捨てマラリアに苦しむ友にキニーネの一粒も与えることなき人非人。それは人道に反する戦犯者とも思えるであらう。

しかし人間食う物もないドン底に落ちこめば、まず人の物を奪う。敵なれば殺しても奪い取る。

一日の行程に戦友の死を見ない日はない。既に白骨化した者、昨日あたりに息を引き取ったと思われる者、腐敗しかけた肉体からは胸を刺す異様な臭気が数十メートル先までその存在を知らせる。

朝目覚めた露营地の一、二メートル先に戦友の死体があるといったことも何回かある。毎日毎日が死との

対面である。戦友の死を悲しむ心根も失せ去ったか。人間の心に魔が棲むのか。あるいは明日の我が身と悟り切っているのか。当時の異常に近い心境を弁明することが出来ない。他人の死は自分の死。人間の死に対する観念すらも忘れられてしまった。ただ食わねば死ぬという現実。生きる事への本能が手当たり次第手を出し、食う事、すなわち生きる事として、本能に生き本能のおもむくままに行動していたのであろうか。ジャングルの路傍に、あるいは泥沼に尊い命を、祖国への捨て石として土となった幾万の将兵。ニューギニア作戦の失敗は何か。今ごろ本土はどうなっているか。明日の運命を語りつつ私達は偵察行を続けた。

途中から山に入る。山また山を越えて目的地に達し、連隊の陣地構成の作戦偵察を果たす事になる。

一つのパバイアを見つけて六人で分け合いむさぼったあの味。一羽の野鳥を射止めて下痢する程に食べ過ぎたあの思い出。苦しい中にも部隊を離れた心安さもあって、まずまずの四十余日は、柴崎少尉の名とともに忘れられない事だ。

昭和十九（一九四四）年八月、私は第一〇二連隊の旗手を命ぜられた（現役将校の補充はないため私ごとき予備士官学校での旗手は数少ないであろう）前旗手の黒崎薫中尉と交代し名誉ある旗手を命ぜられ、感新たなるものがあつた。

これより先、敵はアイタベ、ホーランジャに上陸し猛号作戦と名付ける一大決戦が展開され、基部隊（第五十一師団）からも田中中尉以下渡辺少尉（茨城県真壁町出身の同期生）等の切り込み隊が編成され、アイタベに向かつて行つた。

敵の爆撃はますます激しくなり、まず農園が目標になった。農作業が困難になり、実りを待たずに荒らされたイモ畑からは、その葉とつるを刈り取つてきて保存し、トウモロコシは芯まで碎いて食糧にした。宿舎は転々と移動する。爆撃とマラリア、下痢と飢餓。これに加えて我々を苦しめたのはカスカス（皮膚病）であつた。栄養失調と着たまふの生活の不潔さから、皮膚の脂肪がなくなる。そんな肌が目にも止まらないくらい小さいアブや蚊、山ヒル等に咬まれ吸われた傷

は、ただれて松かさのように、またヒゼン（皮膚癬）のように全身に吹き出す。腹、背中、顔、手、足などところ選ばず膿をもつ。カスカスが出来ようものなら、そのかゆみと煩わしさに夜も眠れず、一日中体をかきむしる。体が温まるとなおさらかゆくなり、まるで気が狂つたようになってかかざるを得ない。翌日は痛さと苦痛で歩行も困難になる。

下痢もまた深刻だ。普段、木の葉や草の実ばかりしか食べていない者が、たまたま捕つた鳥や魚を食べ過ぎると、必ず下痢にやられる。一日数十回の便所通いは、一日で体力が衰弱する。さらに発熱でもすれば死につながつていく。したがって肉類の食べ過ぎには厳重な注意を払っているのだが、食欲を抑え切れない者は苦しみ、一夜にして生命を絶たれ、私達の肉体を維持するための肉類が、かえつて命を奪つてしまうことも知らされる。貴重な肉と知ればこそ一片の肉を十日、二十日と大切に保存する。毎食一口、二口食べて、残りは背のうに収める。しかし燻製にしても不完全な製法では十日もたてばウジが出てしまう。ウジの

湧いた肉であっても貴重さには変わりなく、ウジを取り去り、またそのウジも飯盒の中で炒って口の中に入れる。これも貴重な蛋白源だ。

兵が三人寄れば食べ物の話に花が咲く。銀飯で刺身が食いたい。ウナギ井、天井、てんぶら、ピフテキ、牛井、豆腐の味噌汁が吸いたいと言う者。茶漬けにたくあんがいいと言う兵。卵のりがいいと言えばトロロで麦飯が。アンコロ餅にポタ餅の甘党組。おでんで一杯の左党好みの食べ物や嫌いな食べ物。妻の料理自慢に食道楽等々果てなき食談義だ。そしてあの木に刺身が突いたら、この葉がせんべいだったらとの夢想論。貴様の頬の肉を少し食べたい。彼奴の股の肉は美味そうだ等の危険論まで飛び出して話は打ち切られるが、見る物すべて食物化して連想する程の飢餓に追い込まれていた。

連隊長は暇さえあれば各兵舎を見回るのを日課とし、患者を慰め激励している。飢えた我々は、今日の友の姿は明日の我が身と、日の落ちて輝く南十字星を

眺めては今日の生命を感じ、朝に太陽の昇るのを見ては一日の希望を抱く毎日だが、今日は生きたが明日は死かか一日として死を思わざる日はなかった。部下を失う部隊長の胸中はいかばかりかと思う。路傍に出れば、なかば白骨化しあるいはミイラ化した遺体がゴロゴロしている。宿舎の中は脳症患者の泣き叫ぶ声や怒声が部隊全体の肺腑をえぐる。三日も四日も狂いに狂って一人息を引き取る兵に對し手当ての手段は何もない。皇軍の將兵は皆栄養失調で瘦せ細り、骸骨に服を着せたに等しく、肩や肋骨は出、目はくぼみ、手足は小児に等しいが腹だけは飛び出している。まさに生きた骸骨である。これが戦争であり敗戦將兵の姿なのだ。

我々將校たるも將校とは名ばかりで、むしろ將校なるがゆえの責任の重さは到底兵の比ではなかった。内地やあるいは勝ち戦なら、すべて身の回りは当番兵任せで済んだはずだ。このニューギニアでは食事こそ当番兵がやってくれたが、その他すべて同じ条件である。自分のことは自分でしなければならぬ。行軍中

の天幕張り、食糧探し、作業またしかり、いや、自ら率先して手を下さなければ、一兵も動かすことは出来ない。さらに部隊の掌握、指揮の任務などが加わり、むしろ自分の事だけをすれば事足りる兵隊がうらやましいくらいだった。将校としての誇りが重荷としてのしかかってくる。まして私は旗手であり部隊の注目を集めているため、毅然として身を持さなければならぬ。

小休止の場合も一般将兵は糧探しに出掛けるが、私は軍旗を奉持して空腹に耐えねばならない。その時の辛さ情けなさ、軍旗をすてて一個の芋欲しさに飛び出したかったこともしばしばであった。ジャングル内の行軍では、軍旗がツタカズラのつるにまつわりつき、腰の軍刀が足にからまり倒れたことも一再ではなかった。ついに軍刀を背に軍旗は小脇に抱いての難行になる。「武士は食わねど高楊枝」の心境で餓鬼心を抑える始末だ。一片の肉、一本のイモのつるは明日につながる生命の泉であり、わずかな食物は生命を維持する貴重な薬品でもあるのだ。

何のためのニューギニアだったのか

部隊人員の掌握、兵器の点検整備を済ませ、豪軍に武装解除を受けた我々の部隊は、軍司令官以下一万余の将兵がウエワク北方の海上にあるムッシュ島に集結を終了。時に十月初旬だったが、ムッシュ島上陸後第一に着手した我々の作業は「御魂神社」の建設だった。

人間らしい生活も出来ず、作業のためとはいえ野ネズミの如く祖国の捨て石となって死んで行った戦友。母恋し妻をしので、あるいは目の目も通さぬジャングルの泥沼に、あるいは人目にもつかず病魔に倒され餓餓に死し、そして敵弾に倒れし数方の戦友、部下を弔いつつ一本の柱、一枚の枝に部隊の祈りを込めて作業を進めた。海岸に出れば拾い集めた小石、貝殻を玉石として敷き詰め、思い思いの記念樹を植え、根気よく拾い集めた菩提樹の実を供えたのである。

島での我々の身柄は何らの拘束も受けず、一日一合のオートミールが給与された他、週二個の缶詰、若干の野菜、砂糖、タバコも一日に二―三本支給され、全く予想外の自由な生活を送ることが出来た。そして畑

を耕し半自給の生活に入った。

昭和二十一年の正月が過ぎたころ、俄然、帰還説が島中を駆け巡った。

〔編者注 第一次の復員船は昭和二十年十一月末

「鹿島丸」

いち早く身の回りのものを整理する者も出る始末。

噂を耳にしては一日千秋の思いで帰還船の入港を待ちわびた。しかし入島後も病弱者の死亡が絶えず、豪軍から棄物の手当てを受けるも、なお千八百余人の病没者ありとか。空しく草むす屍と化せし十余万の霊。そして集落を荒らされ、友を、親を、子供を失ったであろう「カナカ原住民」、悪夢の有三年の歴史が閉じられたのであるが、あまりにも大きな犠牲、あまりにも大き過ぎたのは戦争という悲劇ではなかるうか。

昭和二十一年一月、「鳳翔」に乗船、浦賀に帰還した（帰還できた一〇二連隊将兵は九百余人とか「水戸歩兵第二連隊戦記より」）。生きて再び帰り得ずと覚悟した祖国の山を眺め全船涙無き者はなく、肅として食い入る如く見入り続けた。そして私達を驚かせ喜ばせ

てくれたものは、浦賀の街並みと嬉々として遊び回っている子供達の姿だった。この子供達の姿がどれほどか私達の心を慰めくれた事だろう。

援護局の人々、看護婦達の健康色に輝き、キビキビと働く動作に、とくに人目を引いた事は、非常に婦人の多いこと、顔色の白さ、私達にとって神々しきまでに思われた。お互いの顔を見比べてこれが本当の日本人だったのかと、その美しさに見とれたのだった。栄養失調に痩せ細り青黄色くひからびたお互いの姿と、現地人以外見たことのない三カ年の月日の隔たりを、今更ながら今浦島と覚えたものである。

赤道直下から数日にして帰った故国の冬將軍の寒さ。これにも驚き、身震いが止まらず全く閉口した。

走水の病院に入院した私達は、初めて終戦の状況を知った。原子爆弾の脅威とソ連の参戦に改めて拳をにぎりしめた。しかし鉄道もあり街中に大した被害もなさそうだった。安心感（祖国が降伏した以上徹底的に破壊されたものと想像していた）と不満感が交錯したが、タバコ一個が五円もすると看護婦に言われて驚い

た。私達は昭和十八年出征時の物価しか頭になかった。ニューギニアにおける三年間は金を出して物を買ったことも、金さえも見なかった空白。タバコを買うにも果物を買うにもいちいち金を支払わねばならぬ煩わしさにちよっと戸惑った今浦島。わずか四十キロに痩せ細った栄養失調とマラリアに苦しむ体をベツトに横たえ、目まぐるしく変転した祖国にただ茫然として、その真実を知るのに苦しんだ。

食物がないといいながら、私達の目には有り余るほどに感じられた。ただ一発の原爆が降伏の口火になったほど窮迫した祖国だったのか。一億玉砕の意気込みはどこに飛び去ってしまったのか。

約三百円の帰還手当てをいただき、数日間の病院生活後故郷に帰宅したが、何とも納得できなかったのはどうしたことであろう。三年間音信不通、情報とて入らず待ちに待ったであろう老母に会っても素直に喜べなかつた空虚感。今にして思えば誠に不謹慎ながら、当時は如何ともなし得なかつた心境であつた。

ただ単に生きてゐるに過ぎない自分の肉体に思考力は減退し、生の喜び性の欲望すら感じない日々の生活、あれほど待ち望んだ帰国の喜びも何と空虚な喜びであろう。死の恐怖から脱した安心感が、衰弱した肉体が、この空虚感を覚えるのであろうか。

戦地では月に二、三度必ず発熱したマラリアも、極度の栄養失調で一人歩きがやっと出来る程度の死の一步手前の人間も、白米混入のイモ粥で一カ月も過ぎると、日増しに正常化健康体になるのが目に見えるようだった。この要因の一つは、衰弱した体に腹いっぱい食物を食ったら必ず多食により死亡する……と嚴重に軍医から注意されて多食をこらえ、自制し得た事と家族の労であつたらう。

【編 注】

浦沢良平氏の手記（その一）は、Ⅺ巻に掲載されております。